改訂第３回WG
資料２－２

「取組の成果（仮称）」編集方針及び記載項目案

１　編集方針

１）対象　一般向け（配布先・部数については今後検討）
２）目的　研究の成果及び必要性についての理解促進
３）体裁
　・形式　Ａ４　８Ｐ
　・形態　イラスト中心
４）内容
　経緯・背景（内分泌攪乱化学物質に関する説明含む）
　研究成果
　課題と今後期待される成果

２　作成方法

１）第２回会議において、編集方針及び作成方法の審議
２）事務局より上記「③研究成果」の項目について、研究者等に対しアンケート調査を実施（資料２－１）
３）第３回会議において、アンケート結果を基に項目の選定
４）第４回又は第５回会議において、「取組の成果（仮称）」の原案（事務局作成）について審議
５）作成・配布及びホームページ上で公開

３　その他

別途専門家向け報告書を平成１６年度中を目途に作成することを検討

「取組の成果（仮称）」の記載項目案

アンケート結果の回答数が多いものを基に見出しを決め、個別回答から事項を追加。

◎　内分泌攪乱化学物質問題のこれまで

１　哺乳類への影響について
・哺乳類を用いた試験では、１９物質について明らかな内分泌攪乱作用は認められなかった。

２　野生生物への影響について
・野生生物影響実態調査で奇形率等の関連を示すデータは無い。
・韓国沿岸でイボニシのインポセックスの出現が観察された。

３　魚類への影響について
・魚類を用いた試験では、１７物質において内分泌攪乱作用は認められなかった。
・２物質内分泌攪乱作用が強く推察された。

４　ヒトへの健康影響について
・停留精巣が内分泌攪乱化学物質が影響している可能性は低い。
・尿道下裂とビスフェノールＡとの関係は見いだされなかった。
・植物エストロジェンの母子間の移行が認められた。

５　本態解明の研究
・ヒト核内受容体がノニルフェノールに反応することが判明した。

◎　内分泌攪乱化学物質問題のこれから

＊トピック
・国際協力の動向（国際シンポジウム、日英・日韓共同研究、OECD）
＊用語説明
・内分泌攪乱作用とは　　・試験法について